

CROSS美容室

津波被害に遭った人たちを前にして、
自分にできることは何でもしたいと心から思った。

海外からの応援物資、懸命に支援してくれた全国の友人たち、
そして立ち上がった“若林ヘルプ”。

3.11以前に言われていた、高い確率で起こるといわれる宮城県沖地震に対し、私なりに高い防災意識を持っていましたので店舗には地震警報装置を備えており、ある程度の心の準備もありました。そのおかげで発災当日は冷静に避難できました。民生委員を務めていたこともあり、当初1週間は仙台市立南材木町小学校で地元のみなさんと一緒に、夜中まで避難所運営に奔走していました。そこへ、知り合いから「米国の災害支援団体サマリタンズ・パース」と日本国際飢餓対策機構のチームによる200トン(5億円分)の支援物資が米軍のヘリで到着した」との連絡が入りました。物資がほとんどない状況だったので、実際に確かめてみようと思った先に、大量の水や食料、毛布、生活用品が山となっているのに驚きました。「一緒に物資運搬などの活動のお手伝いしたい。これらを最も被害の大きかった地域のみなさんに、どうか早く届けたい」という思いに突き動かされました。

私を気づかい元気づけてくれた被災者の方々。
大学生の若い力が“若林ヘルプ”を引っ張ってくれた。

再開した美容室も営業しながら、半年が瞬く間に経ちました。荒浜や石巻市、山元町、巨野町などの被災地を連日連夜、ときには朝まで飛び回り、4台の携帯電話は毎日充電しても電池がなくなるほどの忙しさでした。気がついたら体重は10kg減り、夜も眠れなくなって、心身ともに限界を越えていたのです。被災者を支援する前に、自分が倒れてしまうのではないかと、自信が持てない状態になっていました。そんなとき、荒浜の方々から「大丈夫か、ちゃんとご飯食べて、無理するなよ」と、何度も声をかけてもらい、そんなやりとりが私を支えてくれました。

2011年9月、自分の身の丈に合った活動をしようと自立支援ネットワーク“若林ヘルプ”を立ち上げました。それまでの被災地支援から被災者の自立支援活動に方針転換し、ご縁のあった石巻市雄勝町と地元若林区の荒浜での活動に絞りました。「若林ヘルプ」は仙台市から仮設住宅の1部屋を借り受け、大学生ボランティアを組織し、仙台市立荒浜小学校児童が対象の学習会開催や、弁当業者と協力し高齢者への廉価な弁当提供、ケーキづくり教室開催など、ボランテ



▲店主の黒須 健治さん



▲CROSS美容室外観

同時に、さまざまご縁でつながりのできた方々や首都圏の友人たちの協力で、緊急車両用の通行証や通話料無料のソフトバンクの携帯電話20台、ガソリン・軽油・灯油など約1600ℓが集められ、支援活動を強く後押ししてくれたのです。



▲お弁当提供の様子



▶白百合女子大学栄養学専攻学生
の料理教室(若林区東通
仮設集会所にて)

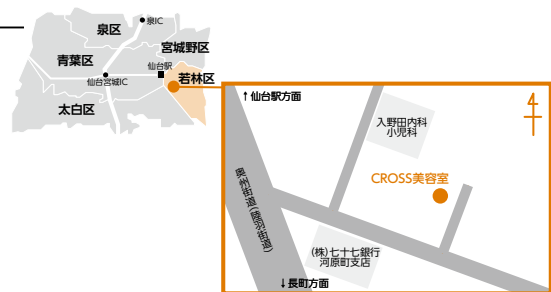
ア活動のコーディネートを続けています。

支援した荒浜小学校の児童37名は、現在別の小学校を間借りしていますが、震災当時の児童に、新しく入学した児童も加えて、10年後の自分への手紙をタイムカプセルに託し、七郷市民センターの敷地に埋めました。

勉強を教えてくれた大学生たちも、タイムカプセルに手紙を入れ、10年後の2021年にみんなで再び荒浜で会おうと約束しました。子どもたちも大学生たちも、それぞれの道をたくましく歩んでほしいと願っています。(店主 黒須 健治さん談)

支援連携先

- 米国の災害支援団体サマリタンズ・パース
1970年設立の緊急援助支援団体。日本では東日本大震災直後から活動開始
- 日本国際飢餓対策機構
1981年設立のキリストの精神に基づいて活動するNGO団体
- “若林ヘルプ”
仙台市若林区河原町を拠点に被災者の自立を支援している団体



CROSS美容室

所在地 〒984-0816 仙台市若林区河原町1-2-48
TEL・FAX 022-222-0734
E-mail hikari1214@i.softbank.jp
事業内容 美容業、着付け
創業年 1900(明治33)年 代表者 黒須 健治
従業員 3名

一般社団法人 国分町街づくりプロジェクト

被災地を支援したいという熱い思い。
“国分町の観光協会”としての役割を果たす。

避難所の暮らしに疲れた方々を
1日だけでも笑顔にしてあげたい。

国分町エリアは地盤が固いため、全損扱いの建物は1か所だけで、被害は思いのほか少なく済みました。そのため、地震発生直後、飲食店関係の方々は、「夕方からの営業までに、電気は復旧するかな」という認識で、震災の被害の本当の大きさを知るには少し時間がかかりました。情報源は携帯電話のインターネットとラジオしかなく、事態の深刻さがみ込めると個人営業の店主さんたちは早くから動き出しました。翌12日には電気が復旧したこともあり、オール電化の建物のお店は早速営業を開始しました。食材が傷む前に、炊き出しや弁当販売を始めました。国分町にあるホテルではお湯が出たため、多くの人にシャワーやお風呂を使っていただこうと、普段は利用されることのほとんどない家族連れにも入浴していただくことができました。ロビーでは子どもたちが嬉しそうに走り回っていました。

一方で、仮設住宅が建設される前から、飲食店オーナー有志が避難

歌や炊き出しで被災者を励ました
“元気 de Night・国分町!”

国分町の飲食店経営者が集まって立ち上げた“国分町街づくりプロジェクト”設立の目的は、国分町を代表する組織を作り、さまざまなイベントを主催し、国分町の情報を発信する観光協会になろうというものでした。そこでこの趣旨に沿って、被災者の支援に取り組み、同時に国分町は元気ですというアピールもできる“元気 de Night・国分町!”を主催したのです。

6月の晴れ上がった日、この時ばかりは避難所を忘れて楽しいひと時を過ごしてもらおうと、いろいろなイベントを開催しました。トークショーやライブ演奏をはじめ、寿司やラーメンなどの炊き出し、ハンドマッサージ、ネイルサロンなど、13ものブースを出して被災者の方々に楽しんでいただきました。会場の元鐵冶丁公園まで無料往復バス3台をチャーターして、山元町や石巻市など4市町村から100名以上の方々に招待し、帰りの車中も大変な盛り上がりでした。中には、そのまま残って夜の国分町を楽しんでから帰られた方もい



▲“キャンドルin国分町”の様子

所に物資を届けたり、炊き出しに行ったりと、精力的な活動をしていました。避難所の体育館の中では、大量の段ボールで仕切られた小さな空間を個人のスペースとして使うという実情でした。何度も通ううちに、何とかここに居る人たちに、たとえ短い時間でも外に出かけのびのびと楽しんでいただくことはできないだろうかという思いが、日増しに強くなっていったのです。



▲“元気 de Night・国分町!”の様子

ました。当日イベントに参加した方には、キュア国分町というカプセルホテルでシャワーとお風呂を無料で利用していただき喜ばれましたが、男性に限定していたことを大変後悔しました。私たちは当初、男性のお客さんが圧倒的に多いと予想しておりましたが、実際には多くの女性たちも参加されたのです。女性の皆さまにもシャワーとお風呂のサービスを準備しておけばよかったと、悔やむこともしかりでした。

2011年以降は、毎年3月11日に“キャンドルin国分町”というイベントを開催し、参加費をすべて被災地へ送り続けています。

国分町は、地元のおいしい産品を使った郷土料理を提供する飲食店が多いのが自慢で、食材の多くを地元から仕入れています。今後も被災した沿岸部などからの新鮮な食材を調達し、1日も早く復興が進むように心から応援していきたいと思えます。

(副理事長 荒川 雅光さん、事務局長 渡辺 亮一さん談)

一般社団法人 国分町街づくりプロジェクト

所在地 〒980-0803 仙台市青葉区国分町2-10-11 第3吉岡ビル地下1階
TEL 022-723-2671 FAX 022-723-2672
E-mail kanri@buncho.jp
事業内容 仙台国分町のあらゆる情報を発信していくプロジェクト
創業年 2009(平成21)年
代表者 阿部 秀彦 従業員 3名



さくら寿司

地域の一人暮らしのお年寄りのために。
消防団員として、寿司屋としてできること。

米があった。何かつくれる。
とにかく一人で困っている人がいるはず。

震災時は店内に物が激しく飛び散りましたが、お客さまは幸いにも帰られた後でした。心配していた電気や水道は1週間ほどで復旧しました。冷蔵庫には3日分ほどの食料が入っており、米のストックも十分にありましたので、何かできることがあるはずだと思いました。というも、この団地内には一人暮らしの高齢者がかなりいらっしゃるからです。

私はアウトドア用のガスコンロを持ち出したり、店では普段使わない電気釜でご飯を炊くなどして、おにぎりを作ることにしました。具は、筋子や梅干、おかか、まぐろフレーク、昆布などで、コンビニエンスストアのおにぎりより大きめに店頭に並べました。近所の方がさっそく買いに来られて、話はまたたく間に広まり、用意した2個パックの30食分はすぐになくなりました。それが4~5日間続くと、おかずも食べたいという声が寄せられ、再開したスーパーで挽肉を

消防団荒巻西分団として救助活動。
地域の実情を知っているからこそできた。

私は寿司屋をしながら、消防団荒巻西分団に所属して活動をしています。震災直後は、店の安全を確認してからすぐ詰所に向かい、午後3時には分団長と二人で管内の巡回を開始しました。地すべりで道路が通れなくなった場所の確認や、倒れたガスボンベの立て直し、一般家庭への安全確認の呼びかけなど、ポンプ車で回りながら夜8時半までかかりました。電線がぶら下がり危険な状態になっているお宅では、お年寄りが手を上げて私たちに助けを求めて呼び止めることもありました。

やっと自宅や店に戻って片付けをしていた夜中の12時頃に、今度は呼び出しの連絡がきました。津波の被害が大きいので、救助活動に人員を出してほしいとのことでした。荒巻西分団では翌日から5名ずつが交代で若林区の川沿いの現地に向かいました。3月12日はまだ水が完全に引いていない状況でしたが、生存者2名をなんとか救出することができました。しかし、以降15日までは残念ながら遺体回収の手伝いとなりました。



▲店主の百々勝利さん(右)と息子の正利さん

買い、煮込みハンバーグにしたり、魚の野菜あんかけを作ったりしてお弁当を出しました。当時はまだ物が品薄で限定販売をしていましたので、1日10食ほどしか作れませんでした。交通手段がなく遠方まで買い出しに行くこともできず、歯も弱くなったお年寄りから「明日も来るからね」と言われ、都市ガスが復旧する4月半ばまで頑張って作りましたね。足腰が弱く、外出ができない方には、水を運んだりもしました。

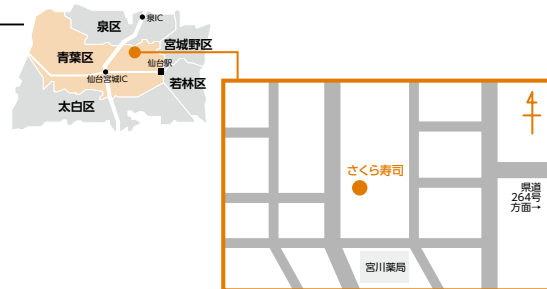


▲さくら寿司外観

荒巻西分団は3月13日まで全員が詰所に泊り込んで待機し、その後も余震が多く火災も発生していたので15日までは毎日何らかの活動を続けていました。

日頃から見回りなどの消防団活動を続ける中で、この団地全体で約100人も一人暮らしの高齢者がいることは知っていました。それが震災後にまず頭に浮かびましたね。そんな方たちへ励まし声をかけながら、できるだけ地域に暮らす方々の役に立ちたいという気持ちが、炊き出しや消防団活動へ向かう原動力になっていたような気がします。(店主 百々 勝利さん、百々 正利さん談)

支援連携先
●消防団荒巻西分団
仙台市青葉区川平地区等の消防活動や非常災害等に対処する消防団



さくら寿司

- 所在地 〒981-0961 仙台市青葉区桜ヶ丘4-27-6
- TEL 022-278-1723
- 事業内容 寿司店
- 創業年 1969(昭和44)年
- 代表者 百々 勝利
- 従業員 2名

(株)シーズ

避難所での暮らしを目の当たりにして、
できることはポップコーンで喜んでもらうこと。

避難所に行かなければ分からない。
津波被災者たちの毎日の避難生活。

卸町にある私たちの本社ビルは築40年以上で、震災の揺れで外壁が落ちるなどの大きな被害を受けました。何度も余震があり何もすることができなかったため、社員は家族の安否確認のためにもひとまず帰宅させることにしました。いまだどんな状況なのか詳しい情報も得られないまま、私は多賀城の得意先へ納品してから帰宅するつもりで車を走らせました。産業道路ではすでに渋滞が始まり、橋に差し掛かったところで川を見ると、5mくらいの高さの波が海から逆流してきたのです。さすがに恐怖感を覚え、波を避けるように進路を変えてひたすら車を走らせ、難を逃れることができました。

1週間の休業を経て事業再開に向けて取り組み始めました。時期を同じくして、荒浜で家をすっかり流された知り合いがいて、避難所に探しに行くことになったのです。このような機会でもない限り避難所には行くことはできなかったと思いますが、想像していた以上に大変な状況を目の前にして、心を突き動かされました。子どもたちも大勢いて、この子たちのためにも何かできることをやらなければという気持ちになったのです。

ポップコーンを作ることしかできないけれど、
再利用できるプラスチック製コップで提供。

私たちは印刷会社ですが、「卸町ふれあい市」という地元のイベント用に、印刷会社らしくないものを出店しようということで、ポップコーンマシンを数年前に複数台導入していました。普段は使わないので、ネット営業のレンタル用品となっており、材料のコーンや資材の在庫も十分にあったのです。「今こそポップコーンマシンの出番だ」ということで、ポップコーンを作れるだけ作って避難所へ持って行くことになりました。

4月から5月にかけての2~3週間の間に、仕事の合間を見つけてはポップコーンを作り、知り合いのいた塩釜の公民館や杉入地区、多賀城、七ヶ浜などの避難所に持参しました。

避難所では、非常食やラーメン以外のものも食べたいのではないかと思います。キャラメル味をメインに段ボールに20~50人分のポップコーンを作って詰め込みました。また、使い捨ての紙コップでは



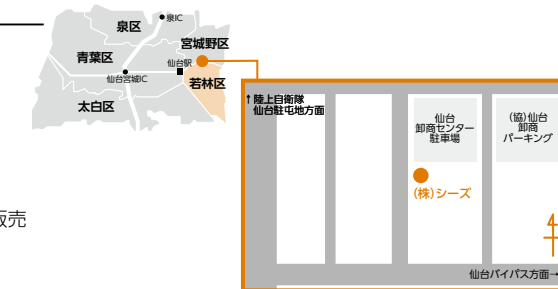
▲ポップコーンマシンとプラスチック製コップ

ごみが出るので、プラスチック製コップに入れることにして、食べた後はコップとして再利用ができますと受付で説明させていただきました。届け先では子どもたちが大喜びし、お年寄りにも食べていただいたようで、多賀城の避難所からは礼状が送られてきました。また、女川には被災して家も家族も失った元従業員がいて、電気もまだ復旧していないというので、発電機にガソリンを満タンにし、食料品なども車に積めるだけ積んで送り出してやりました。

自分で見たことや身近な情報をもとに、できることをやっただけでしたが、何かしら役に立ったのであれば大変に光栄なことです。(代表取締役 鈴木 憲司さん談)

(株)シーズ

- 所在地 〒984-0015 仙台市若林区卸町2-6-5
- TEL 022-782-6916 FAX 022-782-6917
- E-mail info@seeds-2000.net
- 事業内容 印刷および製版、刷版、フィルム出力、色校正、ポップコーンマシンのレンタル・材料の販売
- 創業年 2000(平成12)年 代表者 鈴木 憲司
- 従業員 12名



ジェイアール東日本レンタリース(株) 仙台営業所

レンタカー利用者へ駐車場と車を緊急避難先として提供。
JR復旧工事の作業用としてもレンタカーが活躍。



▲副所長の小林さん(左)と課長の伊藤さん(右)

2~3日間は避難所代わりになった車。
ガソリンのあるうちはエンジンをかけて暖房。

震災当日、仙台駅東口すぐにある当社の駐車場にはレンタカーが40~50台ほど停まっていた。その中に、出発しようとしていた車や到着したばかりの車など、お客さまが乗っていた車両が15台前後ありました。帰着したばかりの方は、新幹線をはじめ、ほかの交通機関もストップしたため、当社駐車場で足止めとなり、出発直前だった方は予定がすべて中止となり立ち往生となりました。当社をご利用いただくお客さまは、仙台駅を起点にJRと車を合わせて利用するケースが多く、ほとんどの方が緊急避難的に車内で過ごすことを余儀なくされてしまいました。交通機関だけでなく、電気やガスといったライフラインも停止している中で「このまま停まってもいいですか」、「車に泊めさせてください」というお客さまに、私たちは全面的に協力することにしました。ガソリンは車に残っている分しかありませんでしたが、夜間はエンジンをかけて暖をとっていただき、トイレや水道などの利用もいただきました。ただ、非常用の食料を常備していなかったのが、それが申し訳なく、悔やまれる点です。

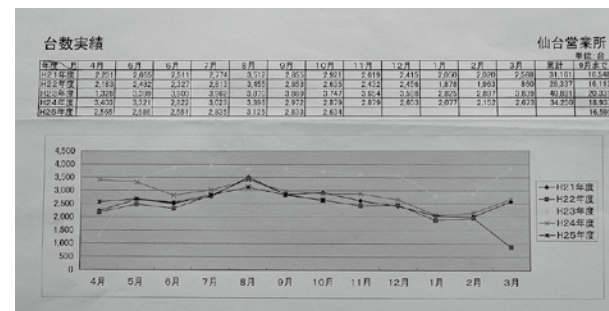
震災前にすでに出発していた車も100台ほど戻ってくる予定でしたが、連絡も取れないまま帰って来ることができない状況でした。

JR東日本の1日も早い復旧のために、
施設管理などの作業用としてレンタカーが活躍。

震災直後は、大船渡や山形へどうしても帰りたいというお客さまに、いろいろな便宜を図りながら、車を貸し出したこともありました。レンタカーで出かけた先でガソリンがなくなり、そのまま東京や新潟などに乗り捨てられた車両を探しにも向かいました。とにかく電気や水道が復旧しても、ガソリン不足にはどうすることもできませんでした。

4月に入ると、全面運休していたJRの復旧工事が急ピッチで進められるようになりました。その時期、私たちには貸し出す車両はあるのですがガソリンが手に入らず、思うような営業ができない状態がありました。そこへ、JRの復旧作業用として大口の借り上げが始まっ

営業所は表向きは休業中でしたが、お客さまの安全が心配で、いつ帰ってこられるのか案じながら3月15日くらいまで24時間体制でお帰りを待ちました。



▲貸し出し実績表(23年度は数値大)



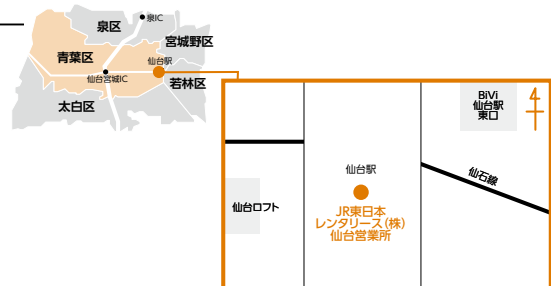
▲震災後に仙台駅西口に移転した仙台営業所外観

たのです。延べ100台もの車両が復旧工事に役立てられました。震災直後に、本業であるレンタカー業務で復興・復旧の役に立てたのですから本当に嬉しかったです。管内の車は30~40台ほどが津波の影響による水没で使えなくなりました。しかし、混乱の中でも何とか目的地に着いたお客さまから、「おかげさまで無事に着きました」という多数の感謝の電話やお礼状をいただき、けが人や犠牲者も出さず役に立てて本当によかったと実感しました。

(仙台支店 課長 伊藤 孝さん談)

ジェイアール東日本レンタリース(株) 仙台営業所

所在地 〒981-0021 仙台市青葉区中央1-1-1
TEL 022-292-6501 FAX 022-292-6502
E-mail er-sendai@jrrel.co.jp
事業内容 自動車等車両及びその他輸送関連機器の賃貸借及び管理業ほか
創業年 1970(昭和45)年 代表者 佐藤 美千代
従業員 500名(全社)



(株)水晶堂眼鏡店

自助から、共助、公助へ。まず自分のことから。
支援は必要とする物を、必要とする方へ。



▲代表取締役社長の松沢等さん

マニュアル通りに動けなかった現実。
緊急時はとっさの各自の判断が大切。

宮城県沖地震がまたいつか来ると思い、備えはしていました。店舗に米を備蓄したり、青葉消防署の指導で防災マニュアルも作っていました。地震の揺れはすぐに収まるものと思っていました。しかし実際はさらに揺れは激しくなるばかりでしたので、1階にいるお客さまをすぐに避難誘導しました。災害時は、自助から始まり、共助、公助という心がけが大事です。まずは自分のことから考え、揺れで扉が開かなくなり「閉じ込められるのは危険」と判断して、とりあえず外に出ました。しかし、歩道は割れたガラスが落ちてくるので、建物から離れた側に移動しました。足が悪い母親が避難する際は、向かいの大成建設の事務所の方に助けていただきました。近所の方の助けは本当にありがたかったです。震災の時は自然に皆が助け合う共助があったからこそ乗り越えられたことがたくさんありました。1時間ほどが経ち、揺れがなんとかおさまってから、やっとアーケードを点検する余裕ができました。危険なところがないか目視で見て

回るなど、自分が今できることをやりました。防災マニュアルでは救護班など、役割分担をしっかりと行っていたが、実際はその通りには動けませんでした。従業員に対しても、ネットを通じて安否確認するつもりでしたが、それもできませんでした。「なぜできなかったのか」をしっかりと考え、これから防災マニュアルの見直しをしなければなりません。



▲水晶堂眼鏡店外観

仲間と共にながれき除去作業に汗を流す。
子どもたちには明るい未来を背負ってほしい。

震災後は、私が主宰しているYGSのメンバーと一緒に、名取市杜せきのした地区のがれき除去作業を実施しました。ゴールデンウィークに入り、名取市主催の「100万人のゴミ拾い活動」にも参加させていただき、地区町内会のみなさんや佐々木名取市長らとともに、杜せきのした公園から名取エアリまでの地域を清掃して回りました。ガラスや鉄くずなどごみの分別をきちんとし、大きいものは重機で運び、細かいものは袋に入れてダンプに積み込みました。普段関わることのない、行政の方と一緒に作業できて、大変有意義な1日でした。

私は愛知県岡崎市の出身で、同窓会をきっかけに愛知県にいる同級生に支援を呼びかけることにしました。仙台市PTA協議会から、「ランドセルと文房具が欲しい」という声が寄せられていました。その話を伝えるとすぐに快諾の返事がもらえました。こうして入学を控えている子どもたちに、ランドセルを送ってもらえることになったのです。愛知県から届いたランドセルは450個。仙台市立立町小学校や仙台市立東二番丁小学校に配りましたが、予想以上の数が集まった

ので、宮城県内や他県にも配ることにしました。同級生同士の連携がうまくいき、大変ありがたいことでした。店にあった米の備蓄も、炊き上げて避難所に持って行きました。また、知人が山形から米を援助してくれて、店頭販売のために店舗の一部を販売場所として貸し出しました。

商店街の取り組みとしては、これからの世代を担う子どもたちのために、震災孤児の育英会基金に寄付をすることとしました。沿岸部の被害が大きかったので、もっと早い段階でボランティア活動を行えばよかったと思い返しています。

(代表取締役社長 松沢 等さん談)

支援連携先

- YGS:自分さがしができる教育を考えた神奈川県教育委員会指定の技能連携校 <http://www.ygs-school.co.jp/>
- 東日本大震災みやぎ子ども育英基金
震災孤児の生活の安定と進路選択の実現を支援する基金

(株)水晶堂眼鏡店

所在地 〒980-0021 仙台市青葉区中央二丁目4-11
TEL 022-222-6963 FAX 022-261-1577
E-mail suishodo@seagreen.ocn.ne.jp
事業内容 小売業
創業年 1926(大正15)年 代表者 松沢 等
従業員 10名



せんだい泉エフエム放送(株)

コミュニティ放送局としての使命感。
地域と連携したきめ細やかな情報を提供。

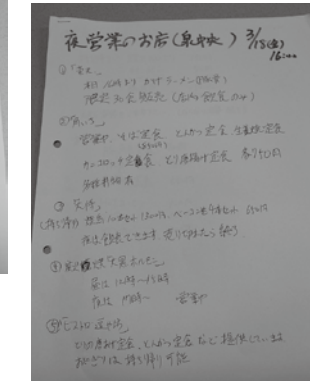
まっ暗な夜に語りかけ続けた「明けない夜はありません」
命をつなぐ情報をなんとか伝えたい。

放送中に起きた激しい揺れと停電で主要な機材が被害を受け、放送を停止せざるを得ませんでした。災害時こそ、コミュニティ放送局としての地域での役割を果たそうとしていただけに、じくじたる思いでした。当局 (fmいづみ) は、NHKと「災害時のニュース利用に関する覚書き」を交わしており、私は夕方にNHK仙台放送局のスタジオに入り、泉中央地区などの被害状況を伝えるとともに、防災士としての立場から避難所での過ごし方や体を冷やさない方法などをマイクを通して呼びかけました。夜遅くなると荒浜地区での大きな被災状況が伝わり、スタジオは緊急状態に。それでも「明けない夜はありません。明るくなるまでみんなでこの夜を乗り越えましょう」と語りかけ、暗闇の中で不安を抱えているであろうリスナーを励ますメッセージを送り続けたのです。明け方になって、被害が大きく、使える状態ではなくなった当局が入居しているビルから、社員と共になんとか放送

機材を持ち出しました。災害時のために発電機と燃料、無線機などを備え、どこからでも放送できるように準備していたのです。



▲臨時スタジオからの放送再開の様子



▲震災直後に放送した、営業しているお店の情報

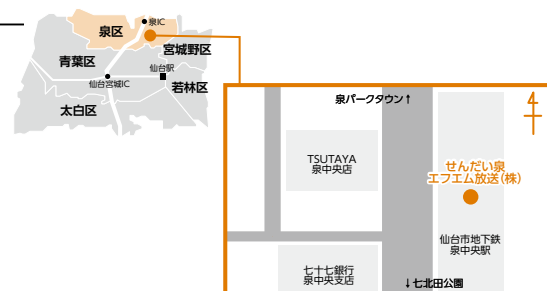
生活情報の収集に奔走しながら、全国からの支援をコーディネート。
勇気と誇りに支えられた、小さな民間放送局の支援活動。

震災翌日の3月12日には泉区役所の会議室を借りることができ、臨時スタジオを設営。22時間14分の放送中断を経て、13時に放送を開始しました。阪神淡路大震災の経験者から助言を得て、長期戦になることを見越して、放送時間は10時から17時までに限定。これは、発電機の燃料やスタッフの体力を温存するためでした。放送再開を告知する手書きのチラシ100枚を電柱に掲示。スタッフ4~5名で生活情報を足で収集し、コインランドリーや銭湯、病院、食品などの情報は、手書きの原稿が入るとすぐに放送しました。日頃から区役所との連携を大切にしていたので、スタジオのスペースもお借りでき、区からも情報提供の要請を受けて市民の皆さまのお役に立てたことは、今後につながる自信と財産になりました。
まだ余震の多い時期に、神戸のラジオ局「FMわいわい」から手回し発電ラジオ200台の提供を受け、幼稚園や学校などへ寄贈する橋渡しもしました。また、東京のTBSラジオやニッポン放送などで集めたラジオも多数送っていただきました。4月1日になると入居していたビルが復旧し、従来のスタジオに戻って放送を再開。そして、

被災した沿岸部のコミュニティ放送局を支援するために、県外のラジオ局や芸能人からの支援の申し出、研究者の調査などのコーディネートにあたりました。この支援活動は現在も続いています。fmいづみは小さな放送局で、普段はCMなどの売り上げで成り立っています。震災時は仕事にはならなくとも、放送局としての使命感と誇りを胸に、災害の状況や生活支援情報を発信し続けました。パーソナリティーの中には避難所から通っていた者もありましたが、地域の皆さまが元気になれるようなメッセージを伝えてきました。おかげさまで、リスナーの皆さまをはじめ泉区役所などから、たくさんのお礼や感謝の言葉をいただくことができました。これからもコミュニティ放送局としての役割を果たしていきたいという思いでいっぱいです。
(取締役事業部長 阿部 清人さん談)

支援連携先

●FMわいわい:世界10言語で神戸市長田区から放送しているラジオ局
<http://www.tcc117.org/fmyy/index.php>



せんだい泉エフエム放送(株)

所在地 〒981-3133 仙台市泉区泉中央1-7-1 地下鉄泉中央駅ビル3階
TEL 022-375-8808 FAX 022-375-7501
E-mail izumi@fm797.co.jp 事業内容 放送事業、イベント事業
創業年 2000(平成12)年 代表者 鎌田 善幸
従業員 6名

仙台観光(株)

被災した地域の方々が笑顔になれる時間を届けよう。
私たちができるのは、楽しくて元気のでる支援。

津波被害に遭った店舗も抱えながら
被災地のみなさまを思い、何か支援をしたい。

震災当日は、本社から携帯電話がつながる範囲で市内11店舗の状況確認に追われました。連絡がとれない店舗は、店の管理担当スタッフが報告に駆けつけてくれました。こちらから出向いていったケースもあり、数日かかって全店舗の被災状況がようやく把握できました。遊技機器や建物の損傷はもちろんです。エレベーターやライフラインなどが復旧しないことにはお客さまの安全を確保できませんので、全店舗が2~3カ月の休業を余儀なくされました。特に多賀城と塩竈の店舗は津波を被りましたので、仙台市内の店舗とは比較にならないほどの大きな被害でした。

被災した社員もいたことから、事業再開に取り組んでいる中でも、被災地に向けて何かやれることをやろうという機運が社内に自然に高まってきました。物資や寄付金を渡すだけでなく、地域の皆さまが少しでも笑顔を取り戻せるような、いろいろな支援方法を社員自らが調べたり考えたりしました。



▲輪投げなどで楽しむ子どもたち



▲仙台観光社屋外観



▲移動式映画バス

“夏まつりの縁日気分”で仮設住宅のみんなが笑顔になった。
ボランティア活動を通じて大きく成長した社員たち。

仮設住宅ができる前は、小中学校の体育館や公民館などでの避難生活が続きましたので、被災した子どもたちには笑顔になってほしいと、まずは“移動式映画バス”での支援活動を始めました。車体の横に大画面が設置された大型バスが着き、放映時間が来ると避難所にいる親子のみなさんが大勢集まってきました。映画の前後にはお菓子やおもちゃをプレゼントしました。アニメ映画などを見た後の子どもたちの楽しそうな笑顔が私たちの活動のエネルギーにもなりました。

震災後半年間は、名取市役所や石巻市河北総合センターなどの大きな施設では移動式映画バス、公民館などでは紙芝居の上演という活動を毎月1回、定期的に開催してきました。

仮設住宅ができると、そこに出向いて“射的”や“輪投げ”、ラーメンや焼きそばの屋台を出して振る舞い、夏まつりの縁日のな空間を設営して楽しんでいただきました。こうした継続的な支援は現

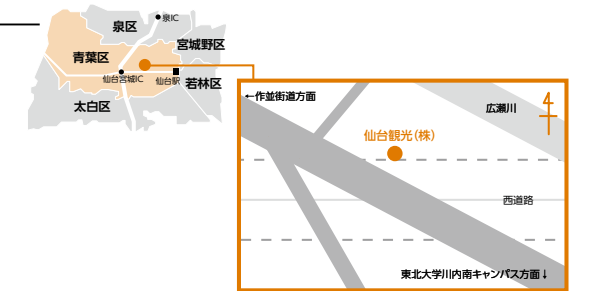
在も毎月続けており、2013年には被災して野球ができなかった少年野球チームなどを対象にした、元プロ野球選手による野球教室を仙台市と名取市で開催しました。

地域のみなさまとのふれあいは、私どものような接客を重視する企業にとってはとても大切なことです。弊社の社員は、さまざまなボランティア活動を通じて直接地域に暮らす皆さまから感謝の言葉をいただき、社会貢献の意義を実感したようです。支援活動後はどの社員からも「やってよかった」「また企画したい」などの声が上がリ、貴重な体験は社員の成長にもつながりました。

(営業本部係長 沼田 充博さん談)

仙台観光(株)

所在地 〒980-0866 仙台市青葉区川内三十人町1-4
TEL 022-223-1211 FAX 022-261-3031
事業内容 遊技場経営・不動産賃貸業
設立 1967(昭和42)年
代表者 延山 寛 従業員 270名



仙台美術研究所

アートとハートで被災地の子どもたちの心に光を灯す。
支援活動が交流につながったことがうれしい。

画材を失っても美術活動で元気づける姿に感銘。
アートができることで、被災地を応援したい。

3.11当時は春日町にあった定禅寺アトリエで美大受験生約20名への授業中に被災しました。講師や生徒の中には自宅に帰れなかったり、住まいの破損が大きく、1週間ほどアトリエに泊まらざるをえない者も数名いました。30体ほどあった石膏像も半分以上が壊れ、学校は当面閉鎖を余儀なくされましたが、知り合いや教師仲間の協力もあって1か月後に再開することができました。石巻から来ている会員もいたので被災の状況を見に行ったり、被災地の生徒には学費を無料にするなど、できる範囲で可能な限りの処置をとりました。

震災は世の中の空気を一変させました。“何が起るかわからないから、やりたいことは今やっておこう”という意識で会社を辞めて入学された方もいて、私たちも前向きに取り組んでいかなければと立ち上りました。

NPO法人“東北の造形作家を支援する会”[♥]では、震災後もなく被災地に画材を送りました。石巻在住の作家がすべて画材を失って美術活動ができなくなったということを知り、仙台美術研究所にあった画材をはじめホームページで呼びかけて広く画材の提供を募ったのです。現地で活躍する作家たちは、震災で心を痛めた子どもたちを

元気づけようと、提供していただいた画材を使って“アートdeスマイル にじいろばれっど”というイベントを開催しました。避難所で暮らす子どもたちが描いた絵や全国から寄せられた虹の絵の展示のほか、バルーンや手づくりクラフトなどのワークショップは子どもたちに大盛況で、笑顔にあふれていました。その後もさまざまな支援を通じて、被災地で活動する作家の方々と交流も深めることができました。



▲仙台美術研究所

支援に関わった方々がそれぞれの活動に広げてくれた。
絵を通じて生まれた支援の輪やネットワーク。

私の主宰する団体“仙台美術協会”では2008年からチャリティーアート展を開催し、収益をドイツ国際平和村を通じて援助の必要な子どもたちへ寄付していました。その活動を、2011年からは地元の被災地への義援金に切り替えることにしたのです。毎年12月に開催する“SENDAIもう一つのページェント展”では国内外47名のアーティストの展示作品をオークション形式で販売し、その収益金は「東日本大震災みやぎこども育英募金」[♥]に寄付することにしました。

仙台美術研究所としても、定禅寺ギャラリーを使っただけのチャリティー作品展には無料でギャラリーの貸し出しを行ってきました。中でも研究所講師の加川広重くんが描いた巨大水彩画「雪に包まれる被災地」は大きな反響を呼び、せんだいメディアテークや神戸市などで個展を開き、会場で募金活動を行いました。

震災後、1年間は定禅寺アトリエで活動してきましたが、2013年3月に河原町に移転することになりました。ギャラリーはなく、チャリティーアート展“SENDAIもう一つのページェント展”も開催できなくなりましたが、被災地へ向けてアートができることをこれからも考えていきたいと思っています。

(代表取締役 畠山 信行さん談)

支援連携先

- NPO法人“東北の造形作家を支援する会”
個展の開催や企画展等、東北の造形作家を支援するNPO団体
<http://www.boat.jp/>
- 東日本大震災みやぎこども育英基金
震災孤児の生活の安定と進路選択の実現を支援する基金

仙台美術研究所

所在地 〒984-0816 仙台市若林区河原町1-2-51 南仙台振興ビル2階
TEL 022-722-9592 FAX 022-722-9593
E-mail info@senbi-art.com URL <http://www.senbi-art.com>
事業内容 仙台美術予備校・カルチャースクールsenbiくらぶ・こども芸術くらぶの運営、仙台美術協会主宰
創業年 1986(昭和61)年 代表者 畠山 信行
従業員 7名



地域生活オウエン団せんだい

どんな時も「自分で選び、自分で決める」生き方。
1人暮らしの障がい者が普通の人生を送るために。

障がい者が避難できたのは自前の仮設避難所だった。
水道は断水せず、電気も2日後には復旧した巡り合わせ。

地域生活オウエン団せんだいは障がい者当事者団体で、約10名のスタッフの半分が障がい者です。発足は障がい者当事者が中心となり、障がい者の地域生活を支えて行こうということでスタートしました。生活を営むうえでヘルパー派遣は重要な役割を担ってくるので、自分たちでその派遣事業所も立ち上げようということで、地域生活オウエン団せんだいの活動が始まりました。

震災当日は会議中だったため大半のスタッフがいて、すぐに行動に移ることができ、ヘルパーサービス利用者の安否確認、スタッフの家族の安全を優先させました。その後、自分たちの居場所を求め、障がい者とともに避難所に向かいました。2カ所の小学校に行っただけなのに、車いすでは身動きできず、トイレも障がい者には使えぬものでした。とても障がい者が介助を受けながら生活できる環境ではなく、この事務所に戻らざるを得ませんでした。仕方が

被災地支援で気づかされた“障がい者福祉の不足”
みんな気張らずに普通に生活できるサービスが必要。

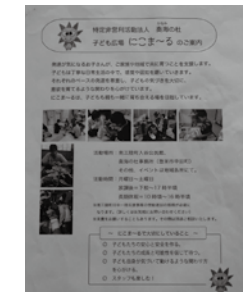
3月22日には10トントラックの第1便で、“AJU自立の家”という、名古屋の障がい者団体から、食糧、毛布、洋服、おむつなど、さまざまな生活用品が大量に届きました。早速マスコミを通じて情報を流してもらい、17日から本格的な支援活動を開始しました。細かいニーズに応えようと、“どういう用途で、どこのメーカーの、どんなサイズか”まで伺って届けるようにしました。食料やおむつ、医療関連の生活物資とともに燃料も送られてきたので、ガソリン不足の中でも積極的に動くことができたのです。支援物資は1週間に1便くらい送られてきましたが、私たちの活動が報道されると、いろいろな方面から物資が届くようになりました。

発災直後は首都圏から物資を送ってもらいましたが、1か月後には地元の流通網も落ち着き、仙台で物資を購入して送ることができるようになりました。被害の大きかった地域でも、復興の状況によってはその地域で調達するということが心げました。

5月には、物資よりも心のケアなど人的支援が求められるようになりました。私たちは通常の仕事もこなしながら、これらの支援のコー

がないので、ヘルパーを利用して1人暮らしをしている障がい者の方たちに事務所に集まってもらい、少ない人手で介助を行いました。このように事務所の奥を自分たちの仮設避難所として、共同生活が始まりました。布団や食料品、灯油を各自持ち寄り、協力し合いながら10名ほどの生活が続きしました。

電気が地震発生2日後には復旧したので、ボランティア団体として障がい者同士のネットワークを生かし、全国へ支援を呼びかけました。



▲奏海の杜設立の案内チラシ



▲被災障害者支援を呼び掛ける大阪のNPO法人“ゆめ風”のチラシ

ディネート役に回ることにしました。私たちは障がいについて理解のある、専門性のあるボランティアを必要としており、被災障がい者を支援する大阪のNPO法人“ゆめ風”[♥]や、大震災障害者救援本部の支援を受けて募集していただきました。

被災地の福祉活動の中で、障がい者を対象とした福祉サービスはほとんど根付いていません。特に沿岸部への支援を通じてその必要性・継続性を痛感し、南三陸町に私たちが中心となってNPO法人“奏海の杜”[♥]を2013年に立ち上げました。ここを拠点として、今後もさらに支援の輪が広がるように取り組んでいきたいと思っています。(事務局長 菊池 正明さん談)

支援連携先

- NPO法人“ゆめ風”:自然災害の被災障害者を支援するNPO団体
<http://yumekaze.in.coocan.jp/>
- NPO法人“奏海の杜”:主に保健、医療又は福祉等の増進を図る活動するNPO団体
http://blog.canpan.info/hsc_kenpoku/

地域生活オウエン団せんだい

所在地 〒982-0011 仙台市太白区長町1-6-1
TEL 022-248-6016 FAX 022-738-9501
E-mail cil-tasuketto@k6.dion.ne.jp URL <http://blog.canpan.info/tasuketto/>
事業内容 1人暮らしの在宅障がい者のサポート
創業年 2004(平成16)年 代表者 永井 康博
従業員 50名

